様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ３０ 年　 ６ 月 １７ 日現在

機関番号：３２６０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2014～2017
課題番号：２６３７０３２５

研究課題名（和文）初期アメリカ文学におけるDutch New York研究

研究課題名（英文）"Dutch New York" in Early American Literature

研究代表者
若林　麻希子（Wakabayashi, Makiko）

青山学院大学・文学部・教授

研究者番号：５０３２３７３８

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,900,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、植民地時代から建国時代にかけての初期アメリカ文学の中に、ニューネザーランドに由来する「寛容主義」の伝統を辿ることによって、ニューヨーク文学のジャンル性の検証およびその歴史的展開の考察を試みた。その結果、ニューヨーク文学が、個人（self）を語ることよりも、むしろ、国家を語ることにより多くの関心を抱くジャンルであること、また、アメリカの歴史的展開を（ピルグリム・ファーザーズを起源とするニューイングランドのWASP中心主義的歴史観とは異なる）多元民族主義から民主主義へのパラダイム・シフトとして記述する国家言説として体系化し得ることが確認できた。

研究成果の概要（英文）：This study tries to provide a fresh perspective to think about New York origin of American literature. By tracing in early American literature an expression of tolerance as a spirit peculiar to Dutch New York, this study has determined the generic identity of New York literature as a national discourse that revises American history in favor of such ideas of pluralism as ethnic diversity and democracy,as against New England's monolithic view of America as a WASP nation.

研究分野：人文学

キーワード：アメリカ小説　ニューヨーク文学　初期アメリカ文学　キャサリン・マリア・セジウィック　ジェイムズ・フェニモア・クーパー　ワシントン・アーヴィング　Dutch New York　建国期アメリカ

１．研究開始当初の背景

本研究は、平成 23 年度から平成 25 年にわたって基盤研究（C）の交付を受けて行った「共和制コスモポリタニズムからみるアメリカ近代化の様相」（課題番号 23520319）で得られた成果を基に構想された。「コスモポリタニズム」をキーワードに据え、アメリカ近代化の歴史を、エスニシティーに関わる意識改革の歴史として再編成することを試みる中で、多民族国家を生きているという国民的な意識が、主に階級意識と人種的アイデンティティに凌駕されてゆく過程を、独立革命後の建国時代のアメリカ文学の中に検証することが出来た。アメリカ人の意識の中で民族的アイデンティティが希薄化する意識変化を、アメリカ近代化の現象として抽出することに成功した一方で、この研究を通して、「コスモポリタニズム」の伝統が、ニューヨークの地域性として形を変えて存続していることが確認された。

そこで、ニューヨークの地域性という問題を掘り下げて調査したところ、ニューヨークがオランダ植民地ニューネザーランド（New Netherland）を起源にもつ地域であることを踏まえ、そのような出自が広くアメリカ合衆国の興りに与えた影響を検証しようとする試みが主に歴史学の分野で進められていることが分かった。その結果、“Dutch New York”なる新たなトポスへの扉を開くことに成功し、「民族的多様性」を 17 世紀オランダの寛容主義を受け継ぐニューネザーランド由来のニューヨークの地域性と捉える視座が確保されることとなった。前回の科研費研究によるこのような成果と近年のニューネザーランド研究の動向から、“Dutch New York”が広くアメリカ合衆国の興りにどのような影響を与えたのか、というこれまで歴史研究の立場から問われてきた命題に対して、文学・文化研究の立場からアプローチする着想を得た。

２．研究の目的

本研究は、“Dutch New York”をキーワードに据え、ニューヨーク起源のアメリカ文学の流れを提示しようとする試みである。アメリカ文学においてニューヨークは文学運動の拠点として、また新たな文学ジャンルの発祥の地としてしばしば取り上げられ、本来、疎かにされている地域ではない。しかし、「初期アメリカ文学」ということになれば、ニューヨークが、いまだ未成熟なアメリカ文学が「アメリカらしさ」を模索する上で必要とした想像力の源泉を提供していた地域であることの理解は未だ確実にはなっていない。そこで本研究では、ニューイングランドを起点に主流化されてきた従来のアメリカ文学の伝統を相対化し得るような「ニューヨーク文学」のジャンル性の確立およびその歴史的展開を見取り図として提示することを目指した。

３．研究の方法

“Dutch New York”をキーワードとするアメリカ文学の流れを体系化するにあたり、本研究では、歴史研究の分野におけるニューネザーランド研究の最新の成果を利用しつつ、文学を制度、文化、社会といったコンテクストとの影響関係でとらえるカルチュラルスタディーズの方法を採用した。

４．研究成果

（１）“Dutch New York”というトポス

グローバリゼーションが推進される一方で、21 世紀は改めて「多文化主義」が見直される時代となった。アメリカ研究においても、移民の流入を背景に「人種のるつぼ」や「サラダボウル」などの表現によって自らの多元性を意識化する 19 世紀半ば以降のアメリカの精神性に批評的関心が向けられている。多元性とは 19 世紀以降のアメリカの文化的特徴として理解されるべきものであろうか。本研究では、“Dutch New York”というトポスに着目することによって、アメリカの国家的本質とは、そもそも、多元主義の方に求められるものであって、むしろアメリカの民族的統一性を WASP に求める伝統的な理解の方が特異なものである可能性を突き止めることが出来たと考える。

ニューヨークは、オランダ系植民地に起源を有する点において、他のアングロサクソン系の地域とは歴史的にも文化的にも一線を画している。ニューネザーランドと呼ばれたその土地は、1609 年にオランダ東インド会社の依頼を受けたイギリス人ヘンリー・ハドソンが、北極海経由の中国航路を探索中、予期せず、現在のオールバニーに到達したことによって「発見」され、1624 年以降に本格的な入植が始まった。伝統的にアメリカの礎と理解されるピルグリム・ファーザーズによるプリマス植民地の建設が 1620 年であることを考慮すれば、ニューネザーランドの入植活動は、アングロサクソン系アメリカとほぼ足並みを揃えて行われていたことになる。ニューネザーランドの側では、プリマス植民地と外交関係を結ぶ試みがなされた記録が存在する。しかし、結果的に、オランダ系植民地とイギリス系植民地が外交的に良好な関係を結ぶことはなく、むしろ、コネチカット川流域の領有権を巡る対立、抗争が絶えなかった。

ニューネザーランドは、実際、ニューイングランドとは対照的な特徴を有する植民地だといえる。17 世紀初頭のオランダといえば、ジャワ、スマトラなどの東南アジアを植民地化することで大航海時代のヨーロッパを牛耳る存在だった。そのようなオランダが新大陸に向ける欲望の矛先は毛皮であったため、ニューネザーランドはインディアンとの毛皮取引所、あるいは、ヨーロッパへの物資運搬の中継所といった商業施設的性格が強い植民地となった。宗教的理想郷の建設という大義名分を掲げて行われたピューリタンら

による入植事業とは、この点において、一線を画している。ニューネザーランドは 1664 年にイギリスの支配下に入るまでわずか 40 年間ほどで実質的には消滅してしまうが、その決定的要因となったのが、ニューネザーランドが、ニューイングランドとは異なり、共同体としての秩序および結束力を欠いていたことだと指摘されている。

ニューネザーランドが植民地として繁栄することはなかった。毛皮貿易からの利益も期待通りには上がらず、西インド会社の投資家たちを大いに失望させた。また、本国オランダの繁栄に背を向けて新大陸での不安定な暮らしを選択する移民を確保することが当然のことながら難しく、ニューネザーランドの人口は著しく伸び悩むこととなった。（ユダヤ人をわずかな例外として）来る者を拒まず受け入れざるを得ない状況が続き、ニューネザーランド、とりわけ、首都ニューアムステルダムには、1640 年頃の時点で約 400 人の居住者がいたが、その中で 18 種類もの言語が使われるほどの民族的多様性を呈したといわれている。17 世紀オランダと言えば、宗教的自由を求めたピルグリム達を受け入れたことでも知られるが、「寛容主義」の精神のもと様々な学問、芸術が花開く文化都市でもあった。ニューネザーランドは、そのような本国の精神性を遺伝子に秘め、無差別（promiscuous）な環境にあって、文字通り、他者性へと開かれた環境を実現することになる。Russell Shorto は、*The Island at the Center of the World*（2005）において、このような無秩序なまでに多様なニューネザーランドを「アメリカ的るつぼ発祥の地（“a birthplace of the American melting pot”）」と呼び、アメリカの多民族多文化主義の起源とする見解を示した。同時代のニューイングランドが、ロジャー・ウィリアムズやアン・ハッチンソンら異端者を追放するアンチノミアニズム論争（1636）やピクォート族インディアンを絶滅に追い込んだピクォート戦争（1636-37）を通して、自らの排他的不寛容性を露呈していたことを思い起こせば、ニューネザーランドをアメリカの多元性の基礎とする Shorto の見解も説得力をもつ。

このような“Dutch New York”に関する知見は、2015 年 9 月 23 日、青山学院大学英米文学科同窓会での講演「Dutch New York――知られざるアメリカの起源」のみならず、本研究全般に一貫して活かされるものとなった。

（２）ニューヨーク文学のジャンル性

アメリカ文学史において、ニューヨークという地域は様々な文芸運動の拠点として重要視され、決して、おろそかにされてきた訳ではない。しかし、初期アメリカ文学史に限定してみれば、ワシントン・アーヴィングやジェイムズ・フェニモア・クーパーといったキャノン作家たちと深い所縁があるにも関わらず、我々はニューヨークの意義について語る語彙を殆ど所持していないのが現状である。このような文学史の空白を埋める試みとして、本研究では、植民地時代から建国時代にかけての初期アメリカ文学の中に、ニューネザーランドに由来する「寛容主義」の伝統を辿ることによって、ニューヨーク文学のジャンル性の検証を試みた。ニューネザーランド時代の歴史資料の翻訳プロジェクト（New Netherland Project）を通して、ニューヨーク文学の研究領域は確実に押し広げられたのは事実である。しかし、その一方で、文学、とりわけ、「小説」以前の一次資料については、やはり限定的なものに留まらざるを得ない結果となった。そのような状況下にあっても、ニューヨークをトポスに紡ぎ出される文学表現が多様性を基調とした世界観を指向することに、差異を肯定するニューネザーランド由来の寛容主義精神の反映を確認することが出来ただけではない。ニューヨーク文学が、個人（self）を語ることよりも、むしろ、国家を語ることにより多くの関心を抱くジャンルとして、アメリカの歴史的展開を（ピルグリム・ファーザーズを起源とするニューイングランドの WASP 中心主義的歴史観とは決定的に異なる）多元民族主義から民主主義へのパラダイム・シフトとして記述する国家言説として体系化し得ることにも気づかされることになった。

例えば、クレヴクールは、『アメリカ農夫の手紙（*Letters from an American Farmer*）』(1782)の中で、ニューヨークに暮らした自らの経験を基に、アメリカ人をイギリス人、スコットランド人、アイルランド人、フランス人、オランダ人、ドイツ人、そしてスウェーデン人の「混交（a mixture）」として提示する。しかし同時に「東部地域は、実際、除外されなければならないだろう。というのも、それら地域の人々は紛れもないイギリス人子孫だからである（“The eastern provinces must indeed be excepted, as being the unmixed descendants of Englishmen”）」と述べ、そうした民族的混淆を基調としたアメリカ人像からアメリカ東部の住人、即ち、アングサクソン系アメリカ人を巧みに除外する。そうすることによってクレヴクールは、アメリカの国家アイデンティティの起源としてのニューヨークのイメージを浮かび上がらせている。同様の言説的傾向は、19 世紀初頭の建国時代のニューヨーク文学にも辿ることが可能だ。ワシントン・アーヴィングは、代表作『スケッチ・ブック』(1819-20) において、ニューネザーランド所縁のハドソン河岸地域を、ネイティヴ・アメリカン、オランダ人、イギリス人、そしてドイツ人などが足跡を残した北米大陸の多元的歴史を民間伝承として継承する共同体として描き出す一方で、そのような共同体の伝統がニューイングランド主導の西漸運動によって喪失の危機に晒される状況に警鐘を鳴らしてい

る。「皮脚絆物語」5部作において、ジェイムズ・フェニモア・クーパーは、白人辺境人ナッティ・バンポーとモヒカン族インディアンとの友愛をはじめとする数々の異人種間交流の舞台としてニューヨークの辺境を理想化する一方で、ナッティ・バンポーを悲劇的に周縁化する西漸運動の暴力性をヤンキー勢力の搾取性と重ね合わせることによって批判した。キャサリン・マリア・セジウィックは、『ニューイングランドの物語』(1822)および『ホープ・レズリー』(1827)においてニューイングランド、とりわけ、ピューリタン的過去を(ある種の悲哀を込めて)批判的に描いたことで知られているが、そのようなニューイングランド批判は、後続する作品の中で、アメリカの国家性をニューヨークの地域性として成就する国家言説へと変容することが確認された。『リンウッド家』(1835)では、独立革命期のマンハッタンに民主主義国家としてのアメリカの起源を見据え、「家庭もの三部作(domestic trilogy)」とよばれる一連の家庭小説は、家事労働をアメリカ女性文化として提唱する契機を市場革命期のマンハッタン社会に見出している。

このようなニューヨーク文学のジャンル性に関する知見を利用して、2014年12月7日には津田塾大学アメリカ文学女性像研究会において口頭発表「歴史小説とニューヨーク――Catharine Maria Sedgwick, *The Linwoods* を中心に」を行い、2015年7月3日には成蹊大学アジア太平洋センターにおいて口頭発表「1830年代アメリカと家事労働――Catharine Maria Sedgwick を中心に」を行い、その成果は、さらに、2017年『アメリカン・レイバー:合衆国における労働の文化表象』(彩流社)所収の論文「一八三〇年代アメリカと家事労働――キャサリン・マリア・セジウィックを中心に」として公表した。

(3)ニューヨーク文学の歴史的展開

本研究は、ニューヨークが、いまだ未成熟なアメリカ文学が「アメリカらしさ」を模索する上で必要とした想像力の源泉を提供していた地域であることを例証することによって、ニューヨーク文学を、アメリカにおける国民文学創生への流れの中で評価する新しい視軸を提供したと考える。更に特筆したいのは、ニューヨーク文学の展開を辿ることによって、アメリカにおける国民文学の創生が、ニューヨークとニューイングランドとの間の文化的覇権闘争の様相を呈していたことを浮き彫りにすることが出来たことである。

ニューイングランドは、1790年代以降、急速に政治的覇権を失う状況に直面していた。南部出身の大統領の出現を機に、それまで伝統的に国政を左右してきたニューイングランド連邦派が失墜するだけでなく、ルイジアナ購入や1807年の通商禁止法による経済的打撃を受けて、ニューイングランドは、発展・拡張するアメリカから孤立し、取り残されゆく運命に激しい危機感を覚えていた。1820年代に入ると、ニューイングランドでは、アメリカの理想的国家像を体現する地域という新たなイメージを掲げて、文化的覇権を掌握しようと目論む文芸運動を開始することになる。これらニューイングランドの動きに関しては、Philip Gould, *Covenant and Republic* (1996), Stephen Nissenbaum, "New England as Region and Nation" (1996), David Waldstreicher, *In the Midst of Perpetual Fetes* (1997), さらに John McWilliams, *New England's Crisis and Cultural Memory* (2004)などの先行研究から多くを学ぶことになったが、これら先行研究に依拠しつつ、本研究では、ニューヨーク文学の展開が、このようなニューイングランドの動きを牽制する形で可能となったことを確認することが出来た。

このようなニューヨーク文学の歴史的展開に関する知見は、「国民文学創生と文化的覇権闘争――セジウィックの『リンウッド家』における建国の地政学」と題する論文に活かされ、『アメリカ研究』第51巻(2017)に掲載されると共に、2017年9月22日、韓国 Chang-Ang University で開催された American Studies Association of Korea 主催の国際学会での口頭発表"Geopolitics of Catharine Maria Sedgwick's America in *The Linwoods*"として公表した。

(4)今後の展望について

ニューヨーク文学が、アメリカにおける国民文学創生に積極的な貢献を果たしたことを例証した本研究は、新たな文学史的課題を提起することになった。ニューヨーク文学とヤングアメリカ運動との関連性である。

ヤングアメリカ運動は、ジョン L. オサリバンが中心となって、ジャクソニアン・デモクラシーを擁護する民主主義推進運動として興り、1840年代以降、「明白な宿命(Manifest Destiny)」をスローガンに拡張主義を唱えるナショナリズム運動へと展開したことが広く知られている。ニューヨークを拠点に展開したこの運動は、アメリカ文学の成立に多大なる影響を与えたことが既に認知されている。しかし、それは主として、ナサニエル・ホーソーン、エドガー・アラン・ポー、そしてハーマン・メルヴィルなど、いわゆる、アメリカン・ルネッサンス文学を代表する作家たちとの関係に基づく評価であり、同時代のニューヨークに身を置いて、執筆活動を行っていたワシントン・アーヴィング、ジェイムズ・フェニモア・クーパー、さらにはキャサリン・マリア・セジウィックといった作家たちとヤングアメリカ運動との関係性については、未だ、体系的な研究が行われていないのが現状だ。

Young America (1999)における Edward L. Widmer によれば、ヤングアメリカ運動には、ニューイングランドに対する対抗文化運動

の側面があるという。Widmer の表現を借りれば、ニューイングランドではラルフ・ウォルドー・エマソンが「一人称単数」の世界観を理想としたのに対し、ニューヨークのオサリバンは、「一人称複数」を指向してヤングアメリカ運動を率いていた。それならば、ヤングアメリカ運動は、エマソンを中心に開花したとされるアメリカン・ルネッサンス期の文学よりも、ニューネザーランド由来の寛容主義の伝統に根差しつつ、民主主義的価値観を追求したニューヨーク文学との親和性で捉えられる方がむしろ合理的とも思えるが、実際の文学史的評価はそうなっていない。そこで、ニューヨーク文学という視点から、改めて、ヤングアメリカ運動を評価するため、平成 29 年度より科研費基盤研究（C）の交付を受けて「ヤングアメリカ運動とニューヨーク文学の展開」（課題番号 17K02553）を遂行している。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計１件）

①若林麻希子、国民文学創生と文化的覇権闘争――セジウィックの『リンウッド家』における建国の地政学、アメリカ研究、査読有、第 51 巻、2017、139-159

〔学会発表〕（計 4 件）

①若林麻希子、Geopolitics of Catharine Maria Sedgwick's America in *The Linwoods*、American Studies Association of Korea、2017 年 9 月 22 日、Chang-Ang University（韓国）

②若林麻希子、Dutch New York――知られざるアメリカの起源、青山学院大学文学部英米文学科同窓会、2015 年 9 月 23 日、青山学院大学

③若林麻希子、1830 年代アメリカと家事労働――Catharine Maria Sedgwick を中心に、成蹊大学アジア太平洋研究センター共同研究プロジェクト「合衆国における『労働』の文化表象」、2015 年 7 月 3 日、成蹊大学アジア太平洋センター

④若林麻希子、歴史小説とニューヨーク――Catharine Maria Sedgwick, *The Linwoods* を中心に、津田塾大学アメリカ文学女性像研究会、2014 年 12 月 7 日、津田塾大学

〔図書〕（計１件）

若林麻希子　他、彩流社、アメリカン・レイバー：合衆国における労働の文化表象、2017、323

６．研究組織

(1)研究代表者

若林　麻希子（WAKABAYASHI, Makiko）

青山学院大学・文学部英米文学科・教授

研究者番号：50323738